

アメリカ図書館界に 足跡を残した思い出の人々

牧野 泰子

半世紀にわたるアメリカでの図書館生活には多くの忘れられない出会いがあった。その内特に記憶に残る今は亡き図書館人について書いておきたい。

福田なをみさんは、東京女子大学卒業後、奨学金を得て

ミシガン大学へ留学し、歴史と図書館学の学士号、つづいて図書館学の修士号を得た。

さらに、ロックフェラー・フエロウとして、アメリカ議会図書館(LC) 日本部長坂西志保の許で研修し帰国した。

一九四七年には、国立国会図書館(NDL) 建設準備のため来日した米国図書館使節

団と日本側との橋渡し役となつて活躍し、翌年イリノイ大学図書館長で同図書館学部長を兼任するロバート・ダウンス氏がNDLのテクニカル・

サービスの指導のため来日した時には、彼の助手として大きな働きをしたという。

一九五三年、国際文化会館

開館と同時に初代図書室長となつて以降、会館を中心に図書館人有志と各種の研究会を開いた。特筆されるべきは、

日本国内の各種図書館から中堅の人材を選び、アメリカへ図書館事情視察団を派遣したことだ。派遣にあたって周到な準備を重ね、ロックフェラー財団と米国図書館協会(ALA)との助力を得て、二月にわたつて全米の80に及ぶ

図書館を見学、この視察団のために組織された八つのワークショップに参加した成果を

日本に持ち帰った。その成果の一つは、日本にそれまで殆ど存在しなかったレファレンス・サービスを定着させるた

めに、書誌の書誌たる「日本の参考図書」を国際文化会館から刊行した事である。この事業は、改訂版から日本図書館協会に引き継がれた。一九六五年に出た改訂版はアメリカの日本学者たちからの要望によつて、英語版が一九六六年にALAから出版されている。

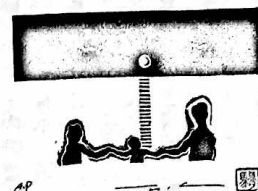
福田さんはその後、慶応大学教授で図書館視察団の一員でもあった沢本孝久氏と協力し、幾人もの慶応図書館学科卒業生を、アメリカ各地の大学の日本研究機関に送り込んだ。この背景には、ロシアでスプートニク打ち上げが成功し、宇宙競争で先を越されたアメリカで俄に地域研究が盛んとなり、各大学で雨後の筍のごとく日本研究が始まったことがあった。これは、ダウンス氏が国会図書館の基礎を作り、日本図書館学校の設立に大きな役割を果たしただけでなく、二度の滞日中に日本の厳しい食糧事情を知つて帰

たか

国後も日本の図書館人たちに個人として食糧を送り続けた事、またALAがこぞつて日本の図書館発展の為に強力を惜しまなかった事に対する恩返しでもあった。

日本からの来訪者に、「あなたはいずれ勲章をもらいますよ。」と言われたダウンス氏は、その後「何時貰えるのかって何度も聞かれてこまっちゃつてるの。日本政府は慶応の図書館学科長だったギトラーさんに勲章をあげたから、その件はもう済んだと思つているから。」とおっしゃつていたが、日本図書館学校設立のためにワシントン大学図書館学部長の職を辞してつくされたロバート・ギトラー氏に遅れること22年目に叙勲された。この間、福田さん及びNDL関係者の方々のご努力は大変だったろうと想像する。ダウンス氏叙勲の為に申請をするから資料を集めてほしいという要請が、NDLから当時イリノイで日本資料を

随讀随記



小出 昌 洋

忌みごと

筆のサイガサをこき下げて、そのまま文字を書くのは、野邊送りの帳つけの時に限るので忌むものだ、といつても、いまでは、サイガサをこき下げて文字を書かうなどといふはない。また硯に筆も日常茶飯、使ふ人は少ないだらう。だから硯の水に茶湯を入れるのも、前文に同じく、仕来りて忌まれることを、知る人もあないかも知れない。かうしたことを教へられた世が、懐かしい。

椎の實筆

かつて手習ひには椎の實筆を使ふ。安い筆だからサイガサな



福田なを氏 国際文化会館のオフィスで

担当していた私にあったのだが、調べようがなく、いささか心もとない報告書を作成した。それだけに、一九八三年叙勲の知らせがあったときには本当にほっとした。ダウンズ氏も喜ばれ、笑顔で勲章を着けられた氏の写真を国会図書館に御送りした。写真は、勲章の正式な装着の仕方わからないが、写真師の私が撮影した。

福田さんがミシガンにいらつしやうてからは、何度かお目にかかるチャンスが出来、書誌の解題は、フランシス・チェニーのスタイルを踏襲する事、しかし、本の評価は、先生方のなさる事だから、図

書館員は紹介をするだけ、先生方の道具作りが仕事である、と教えられた。

ミシガン大学を退職なさった後、一九七九年に Bibliography of Reference Works for Japanese Studies を出版なさり、これは、長年にわたり、日本担当司書、学生、研究者の研究のバイブルとなった。アメリカで試行錯誤を繰り返しながら仕事をしている我々日本関係司書は、どれほどこの本の恩恵を受けた事か。

私がイリノイで日本関係書誌のクラスを教えている事を知って、日本史と日本文学史の解題の原稿を見てほしいと送ってこられた原稿は大変立

派なもので、良い勉強をさせていただいた。ご病気のダウンズ氏のお見舞いに福田さんのお供を

して伺った時、ダウンズ氏は、とても喜ばれたのだが、ほんの10分余り経ったところで、鬼軍曹のようなダウンズ新夫人が「これでおしまい」とお

つしやうて、我々二人は追いつけられなかった。「あれでなくては病人の看病は出来ないのね。」と、ご自分に言い聞かせるようにおつしやうた福田さんの寂しそうな顔が未だに目に浮かぶ。

ハワイに移られた後、肉親より大事と福田さんがおつしやうたという新しいお友達が出来て、99才でお亡くなりになった。生前の望み通りハワイのカネオエ湾をクルーズで巡航し、楽士たちがアロハオエを奏でる中、20人余りの福田さんゆかりの人々が花やレイを海に投げ入れながら散骨されたと姪御さんがお知らせくださった。日本とアメリカに橋を架ける事を目指した新渡戸稲造の女性版ともいえようか。その情景を思い浮かべると心が和んでくる。

ちなみに新渡戸稲造は福田さんの母校東京女子大学学長でもあった。

「ダウンズ先生がいらつしやる間はあなたはここにいなさいよ。」と、私は福田さんから厳命を受けていたのだが、氏が亡くなる二週間前に家庭の事情でニューヨークのコロナビア大学図書館に転職してしまった。元日本部門主任だった甲斐美和さんは、その頃はとくに退職していらしたのだが、東アジア図書館のあるケント・ホールにオフィスがあり、週日は毎朝建物が開く七時半には建物の前で待つていらつしやうた。私がオフィスに着くと「甲斐です、御電話ください。」というメッセージが入っている事が良くあった。ご質問は多岐にわたつていて、例えば「チャータースクールって何ですか?」ご存知?と、いった調子で、その頃既に80才近くいらしたのだから、そのエ

ネルギーと旺盛な知識欲には

どは掛けてない。ところでいま、椎の實筆といつても解らないかも知れない。さういへば田安家の士で、趣味家として知られる椎園蜂屋茂橘の著書に、椎の實袋、椎の實筆の書名があった。

墨すり歌

早朝机に向かひ墨をする。手習ひをするといふわけでもないが、てんでん天神様墨すつておくれ墨と硯は仲良しこよし、さてかやうの俗語を知る人もゐなくなつた。森先生はかうした俗語の閑却せられるを憂へた。

包み紙

金物屋は釘を手習草紙の古いもので包む、とかつて竹清翁は書いてゐる。私の子供の頃は古新聞だつた。さていまは、ピニールの小袋に入れて來れる。

早きよし

すべて物は早うて悪し大事なし、遅うて悪し猶わるし。享保年間に書かれたらしい著者未詳の隨筆、思出草にかやうにある。森先生は少年の頃、雑誌冒険世界に、佐々木照山の談話で、早しよし、ちやうどよきはあぶな

圧倒されっぱなしだった。

甲斐さんは、サンフランシスコに生まれ、14才の時に日本に戻り、一九三二年には第一回日本音楽コンクールで全部門のグランプリを獲得、将来を嘱望されたピアノストだったという。日本が真珠湾攻撃をした時、サンフランシスコにいらっしやった為、ユタ州の砂漠にあるトパーズ敵国人収容所に送られた。夏の暑さは摂氏40度を越え、冬の寒さは零下15度にもなり、鉄条網に囲まれ、武装した兵隊に見張られての収容所生活、日本で将来を嘱望されたピアノストとしての華やかな生活との落差にどんな思いで毎日を過ごされたかと思うだけで胸が痛むが、ご本人は何もおっしゃったことはなかった。

アジア図書館に移り日本部門主任となり、一九八三年定年退職なさるまで多くの学内外の学生や研究者を助け、後進を育成された。田舎の大学から移っていった私も本場に親切にして頂いた。いつも周りの者を何気なく助け、楽しませてくださる素敵の方だった。

退職後長年かけて完成されたお仕事の一つに、コロンビア大学にある日本関係の図書以外の日本に関係した資料の目録がある。「やつと終わりに近づいたと思うと新しい資料が見つかってしまつて」と、笑っていらしたがそれがやつと完成した時、「これはあなた個人に差し上げるのですよ。図書館ではありませんよ。」というお言葉があったにもかかわらず、その貴重な資料を独り占めにするのは忍び難く、お言葉には背いてしまったが、館内の稀観書室に備え付けて活用させて頂いた。

甲斐さんが、長年アメリカ国内のみならず、日本からの留学生、研究者、研修生などを親身にお世話なされた功績に報いようと、NDLの方々を中心となつて叙勲申請をするので、アメリカ側の資料を集める役目を仰せつかった。しかし、甲斐さんと直接交渉のあつた学生も教授も学外に出たり、退職したり、亡くなつていたりして、資料集めは困難を極めたが、ドナルド・キーン教授をはじめとする退職なさつた先生方、現役の先生方が熱心にサポートしてくださり、なんとか報告をまとめて提出はしたものの、実際に決定するまでは心許無かつたのだ。日本側でも強力なサポートがあつたようで、一九九五年皇居での叙勲式から戻られた甲斐さんは、とても楽しそうに、いつも通りユーマアを交えて一部始終を報告してくださり胸をなで下ろした。

正式のオファーを貰いながら家庭の事情で行けなくなつてしまつたシカゴ大学図書館の日本資料担当者のポジジョンに、奥泉さんがメリーランド大学から移つてこられたと言ふ妙なご縁からおつきあいが始まつた。The Asian Studies Handbookの日本のセクション担当を頼まれた時には、私の不得意な社会科学部門は奥泉さんをおいて他に無いと執筆を御願ひするまで30年にわたる長いお付き合いだった。その時も「いいですよ」と、二つ返事で引き受けてくださった。編集者が不慣れで日中の細かい調整に大変手間取つたが、漸く「じゃこれでいきましょう。」といつて下さつた奥泉さんからの原稿が、待てど暮らせど私の手許に届かない。奥泉番にはなれていないはずの私も、遂にしびれを切らせて、問い合わせたところ、漸く初稿の下書きらしきものが届いたのだが、カットアンドペイストしようとする

し、遅し悪し。とあつたことを折りに觸れ思ひ出される、といつてゐる。先生と待ち合せなどすると、決まつて早くから待たれる。それで私も早くに出かけたら、ああなたは時間通りに来ればよい、といはれた。先生は先きについては、讀書してゐただつたらしく。

早喰ひ

右、思出草の條の前にはまた、下郎の世話に、早みち、はや喰ひ、早せつちんと云り。ともある。先生との食事で、早喰ひの私は、まう少しゆつくり食べなさい、と云はれたことを、思ひ出す。

まつのやまかがみ

松岡恕庵の隨筆、詹々言には謠について敘する條が散見する。その一つ、松山鏡については、鶴が鏡に化すことを云つてゐるが、それは神異經に見え、といふ私は、まだ神異經は聞てゐない。なほ松山鏡は切能物の働き物としては珍しく、一場物である。表題は、まつのやまかがみ、と訓むのが正しいよしを、野上豊一郎さんの書物で知る。



左、元ミシガン大学の仁木賢司氏、中央が甲斐氏、右側著者(アジア学会の夕食会)

と、勝手気ままに飛び跳ねて私の乏しいコンピューターの知識では手に負えず、思いあまってご本人に伺ったところ、「あちこちで最低六つの違うコンピューターを使っているのだから」という返事が返ってきた。思えば、その頃から膨大な初期在北米日本人の記録のお仕事で飛び回っていたのだらう。そのうちご病気が多いという噂を聞いてご

連絡したのだが、「この仕事、後はいつさいあなたに任せます。」との事だった。私が二〇一二年に退職のご挨拶をした時には「僕はもうしばらく頑張るつもり」と元氣よくおっしゃっていらつしたのに、二〇一三年七月二十一日にお亡くなりになった。こんなに早く悲しいお別れが来るとは思ってもみなかった。学会などどこに出かけても、行く先々でもこつこつと調べものをして、沢山の重要な著作をものさされた。未充分の『初期在北米日本人の記録』は、終生良き理解者協力者でいらした奥様の圭子さんが続けられる事になった事を知り喜んでいる。

(元プリンストン大学東アジア図書館日本資料担当 司書)

初夏の山形の文学館と古書店

田坂憲二

斎藤茂吉の愛した翁草の季節となったこともあり、山形の古書店と文学館を訪ねてみた。東京から出かけるときは、普通ならば山形新幹線に乗る使ってみる。羽田から山形空港に向かうときに、眼下に美しい猪苗代湖を望むことができるからだ。このレイク・ビューには追加料金は一切かからないという利点があるが(当たり前か)、ただ左側の窓際の座席を確保することが肝要である。初夏の東北地方にはまだまだ梅雨前線は来ておらず、猪苗代湖を堪能することができた。機上から猪苗代湖や猪苗代城址の方角を見ていると、保存修理工事の終わった姫路城天守に空から行ってみたい気持ちにさせられる。山形・名古屋便や山形・伊丹便はあるが、岡山か広島

あたりと結んで、天守物語を空から体験便というのはどうだろうか。文学で地域振興が出来ればこんなすばらしいことはない。

さて、山形空港からはリムジンバスとマイクロボスの中間のようなバス(大きさをいっているのではない、運転手さんも含めて親しみやすさがあるということだ)で山形市に向かう。飛行機と接続しているので所用時間も新幹線です。山形入りすると大差ない。まずは山形駅から仙山線で山寺に向かう。ただし軟弱な私は、後の予定があると自分に言い訳をしつつ立石寺は根本中堂までにとどめ、山上に登るのをはやばやと放棄する。蟬塚にさへ行かない軟弱ぶりを笑わば笑え、清和天皇御宝塔前の芭蕉句碑と芭蕉・

誦 誦

太宰春臺の倭讀要領に讀書法の一文がある。その冒頭に、學問は書を讀むより始まる。讀書の法、二あり。學者先づ華音を習ひて次に倭語の讀みを習ふべし。そのゆゑは、書を讀む者は記憶を本とす。萬卷の書を讀んでも記憶せざれば用に立たず。されば中華の學者は書を讀むでは必ず誦をなすなり。誦とはそらに讀むなり。とある。

文字を識る

ついで、書を讀むは文字を識り義理を明らめん爲なり、といひ、語句を誦誦、記憶して一部の書、歴々として胸中に在るときは卷を開くごとくづくにてもあれ、我が眼は始終に及ぶなり、といふ。

熟 讀

なほ春臺先生は、誦誦記憶することは熟讀より得るもので、誦誦すれば記憶したものは久しくなつても忘れることはない。されば熟讀するといふことは、讀書の要法といへるだらう。かやうにいづつてゐる。